

歯科医療者は天職であるのか

現在、私たちは「歯科技工士問題」について喧々囂々、侃々諤々の議論をやっています。

そして間もなく公開にこぎ着けることになりそうです。

経営者の視点が強過ぎるのではないか、経済学といってもミクロもわからずマクロを述べていいのか、だいたい何処を向いてもものを言ってるのだ、誰のための議論だ。

—さて、暇でもないのに書いた暇つぶしの駄文です。
本編はこんなじゃありません。
というかこれは予告編ではありません。

「経営」と「経済」という言葉は扱いが難しいと思います。経営哲学という言葉は頻繁に用いられますが、一方で経済哲学という言葉もあります。価値観と換言してもいいのでしょうか、ともかく意図的にそういった部分を切り捨てることによって科学であろうとしたのが経済学だとの考えもあるようです。

何も経営の専門家に哲学があつて、経済の専門家に哲学がないということではありません。アダム・スミスは自分のことを経済学者とは考えておらず、実際は哲学者であったとはよくいわれることです。

現在社会は資本主義経済によって成り立っています。マックス・ウェーバーは、その資本主義なるものを育んだのは自由への渴望でなく、神への服従という反人間、反自由の宗教倫理であり、徹底的に合理化され、意図せぬ結果として生じたのだと述べています。

マックス・ウェーバーといえば解釈の難しいことに **Beruf** 論が知られています。

天職という言葉があります。古代ヘブライ語（旧約聖書）にはその概念が存在しましたが、ギリシャ語（新約聖書）、ラテン語（カトリック）ではその概念が消失し、単なる職業という意味の単語しか存在しなかったそうです。そして千年以上の時を超え、その概念を蘇らせたのがマルティン・ルターであったとウェーバーはいいます。

現在のドイツ語の **Beruf** には、職業という意味だけでなく、使命、召命そして天職という概念が含まれます。ルターの訳した聖書によって天職という概念は、各国へと訳して流布されることになったそうです。



こういったことを受け入れる環境に早くからあったからでしょうか、ドイツでは10歳にもなれば天職を選ぶような制度になっています。ドイツの教育制度の長所は、授業料などが無料であるといったこと以外に、自分の将来に密接に結びついていることだといわれます。一方で細分化し過ぎており、職人系の学校では中途退学者が多いことが短所として挙げられています。

詳らかには知りませんが、外から見ると、国家試験、ディプロム試験、マギスター試験、マイスター制度と、ともかくは資格がものをいう社会であるといえそうです。

ところで我が国の、私たち歯科医療者が持つ資格の意味合いは。果たしてそこに天職という概念は含まれているのでしょうか。

我が国の歯科医療を支えるのに必要な歯科医師、歯科技工士、歯科衛生士の数が果たしてどれくらいのものなのか。関係者の多くが需給を見誤ることによって、最早見積書を出すことが出来なくなっているのではないか。

我が国には有資格者や職種を尊重するような背景が認められないのかも知れませんが、そんな中でも歯科医療関係者には、とかく経営者の視点や感情といったものが先走る傾向にあるように思えます。

しかし有資格者として何かを訴え出るなら、自分の感情や狭い見聞なんてものはなるべく排する必要があることは言うまでもありません。

私たちは、これが天職であるといえるくらいの意志の強さを求められているのか。

ともかく「求める」側にいるのは国民であるに違いはないでしょう。



2010/07/22

みんなの歯科ネットワーク

